目　次

巻頭言……一
小林芳規博士略年譜……二
小林芳規博士研究業績目録……一五
「水尾點」を巡つて……築島　裕……三九
形容詞「いか（厳）し」の消長――「いかめし」「いかめい」との関連から――……坂詰　力治……五三
『古事記』カガナベテ再考……山口　佳紀……七三
「さざえ」考……宮澤　俊雅……八九
子音韻尾の音仮名について……沖森　卓也……二一四
大東急記念文庫蔵続華厳経略疏刊定記巻第五の訓点について……月本　雅幸……二三〇
明恵関係聞書類としての『観智記』鎌倉時代中期写本の基礎的研究……土井　光祐……二四一
高山寺蔵「聖教目録（禅浄房灌頂）」に記載された聖教について――高山寺現存本と対比して――……徳永　良次……二六五
漢文文書に於ける助詞の仮名表記の変遷――「仁」の消滅と「江」の出現を中心として――……矢田　勉……二九三

漢語「不合」の語史について……山内洋一郎……二一
五音節名詞の東京方言アクセント……柳田　征司……三一
病と風……東辻　保和……二三六
漢音の声母識別声点資料について……沼本　克明……二五〇
「器量」と「器用」……来田　隆……二六六
上代における助数詞の古層と新層
——船舶類・履物類・机類を数える助数詞——……三保　忠夫……二八七
中世地方文書における文字詞……菅原　範夫……三〇九
藤原定家自筆『拾遺愚草』における和語表記の漢字
——使用頻度に着目して——……村田　正英……三二四
西方指南抄の漢文訓読語について
——書状掲載語彙の性差、有識差の視点から——……金子　彰……三四一
鎌倉時代における胎蔵儀軌の訓読について
——天台宗寺門派資料を中心として——……松本　光隆……三五七
和化漢文における否定辞を伴う「サキ」について……鈴木　恵……三七六
古記録における「漸」と「漸漸」の意味・用法について……原　卓志……四〇五

中古・中世における「たよりなし」「びんなし」「ふびんなり」……田中　雅和……四二七
字音直読資料としての高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経
——漢音系字音の混入について——……榎木　久薫……四四八
類聚名義抄における史記の訓の採録について
——図書寮本における不採録の訓を中心に——……山本　秀人……四六六
鎌倉時代における舌内入声音の諸相……佐々木　勇……四九二
奈良国立博物館蔵『雑筆集』五巻と高山寺本表白集
——勧修寺法務寛信門流の表白集編纂活動——……山本　真吾……五一二
鎌倉時代前期の古文書に見られる「所詮」の用法について……西村　浩子……五四五
東大寺図書館蔵『法華経品釈』〔113—260—1〕解題並びに翻刻・影印
——院政期法華経説草類聚書『法華経品釈因縁抄』として東大寺図書館蔵『法華経品釈』〔113—260—1〕を読む——（上）……石井　行雄……五六八
平安・鎌倉時代における「和ス」の意味用法
——「ワス」と「クワス」を比較して——……柚木　靖史……六〇六
「謳歌」の意味について……栾　竹民……六三
中世における動詞句の変遷に関する一考察——「肝ヲ消ス」を中心として——……青木　毅……六四一
興聖寺一切経における訓点資料について——その素性を巡って——……宇都宮啓吾……六六二

図書寮本『類聚名義抄』と観智院本『類聚名義抄』の記載内容の比較 …田村　夏紀……六九一
——和訓と字体注記に注目して——
平安・鎌倉時代における「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙…土居裕美子……七〇八
冷泉家時雨亭文庫蔵書の仮名文における「オホ～」表記について …豊田　尚子……七二四
——俊成・坊門局・定家・為家の自筆本に注目して——
『とはずがたり』の複合動詞——数量的概観——……岡野　幸夫……七四一
古代語における「来（く）」の一用法について……古川　俊雄……七五六
明月記における「欲」字の用法について ……連　仲友……七七三
類義の熟字「比年」「頃年」「年来」について ……橋村　勝明……七八一
——中世真名本の用字の背景に関する一考察——
醍醐寺蔵探要法花験記における動詞の使用について ……磯貝　淳一……八〇〇
——出典からの改変の問題をめぐって——
日本語における半濁音化をめぐる問題——声明資料を手掛かりとして——……浅田健太朗……八一六
中世における教行信証諸本間の訓読の異同——「唯」「惟」字について——…永松　寛明……八三六
謡曲詞章における音便使用について——その時代的変化に着目して——……早川　陽子……八五八

鎌倉時代語研究

に拠った。

なお、用例の表記にあたっては原文のかなを漢字に直したり、濁音符を付したりしたものがある。

『古事記』カガナベテ再考

山口佳紀

はじめに

『古事記』中巻の景行天皇の条には、一般に「筑波問答」の名で知られる問答歌が記されているが、その答歌の中には「かがなべて」という歌詞が含まれている。この歌詞の意味については「日々並べて」の意であるとする宣長説があり、既に解決済みのものとして扱われることが多い。

しかしながら、右の宣長説に看過しがたい疑問があることは、従来注意されていない。これについては、本稿の筆者が校注に参加した新編日本古典文学全集『古事記』（神野志隆光との共編）も例外でなく、「日々並べて」の意として、簡単に片づけてしまった。ここに改めて、この歌詞の意味を考え直してみたいと思う。なお、『日本書紀』にも同じ歌が出て来ており、前後の文脈は多少異なるが、この語句の意味を考える上では特に問題が生じないので、本稿では『古事記』の本文を中心にして検討することにする。

一

まず、この歌が出て来る前後の文章を新編日本古典文学全集『古事記』の訓読文によって示すことにする。ただし、